

＜県研究主題＞

生徒一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 中田 真由美 (湘南三浦地区)

＜研究主題＞

話すこと・聞くことの指導と評価の工夫 ～売上げ日本一のセールスマンになろう～

1 提案内容

(1) 実践に向けての課題意識

「話すこと・聞くこと」の学習では苦手意識を持っている生徒が多くいる。特に、発表の場面では、顔を上げて聞き手の反応を見て話すことに慣れていない生徒が多いことが課題として挙げられる。研究推進校として3年間、自校の研究テーマ「豊かな心を育む言語活動～生きる力の育成を目指して～」に沿って聞き手を考えて話すことや気持ちを表現すること、話し手を理解しようと考えながら聞くことで豊かな心を育む学習活動を試みた。また、国語科では3つの目指す生徒像をまとめ、言語活動を通して伝え合うための基礎を身につけることを目指した。

＜国語科の言語活動を通して目指す生徒像＞

- ① 自分の意見をしっかりと構築し、整理して分かりやすく言える生徒
- ② 他者の意見をしっかりと聞いて、自己のもの見方や考え方に取り入れることができる生徒
- ③ 他者の意見を尊重する、受容的な心を持つことができる生徒

(2) 生徒の実態

漢字を書くのが苦手、勉強が苦手など、自信がなく積極的ではない、自己肯定感が低い生徒が見られる。そのため、いろいろな場面でお互いを認め合い、ほめるなどの言語活動を取り入れ、安心して発表できる場面作りに力を入れた。また、作品を作って廊下に掲示することを定期的に行い、作り上げたものをお互いに見合うようにした。このような伝え合う言語活動を通して、目指す生徒像に近付けるよう取り組んだ。

(3) 授業実践について

この単元は「書くこと」の教材として位置付けられている「理想のロボット」(中学生の国語三年 三省堂)を、売上日本一のセールスマンになろうという条件を付け、「話すこと・聞くこと」として取り組んだものである。「発表の苦手意識を減らすこと」、「聞き手を見て話せるようになること」、「説得力のある話ができるようになること」の3つを単元の課題とし、場の状況や相手の様子に応じて話ができるように、「付けたい力」を意識しながら取り組めるような手立てを考えた。

- ・聞き手の様子に応じ、説得力のある話ができるようになる。
- ・キャッチコピーを考え、具体的に話す。
- ・テレビショッピングのCMを見て、プレゼンテーションのイメージを膨らませる。
- ・話す場面と相手を考えて話す。

相手→高齢者、大人、主婦、中学生、小学生 場面→店頭販売、テレビのCM、訪問販売

- ・セールスするロボットの絵を映し出すなど、拡大投影機を活用する。
- ・少人数の中で相手を見て話すことを目的とした、グループでの発表練習を行う。

- ・評価項目を使って意見交換をする。評価を明確にして他者を評価することで個人発表につなげる。

#### (4) 成果と課題

成果として、「売り上げ日本一のセールスマンになろう」という条件をつけることで一人ひとりが役になり切り、発表に対する苦手意識を減らすことができたことがある。それは、単元の3つの課題に対しての生徒の感想からも見てとることができる。

課題として、指導事項の扱いを曖昧にってしまったこと、「場の状況」は意識させられたものの、「相手の様子に応じ」た具体的な手立てや教師自身の実現してほしい姿の押さえは十分でなかったことがあげられる。

## 2 協議内容

グループに分かれての協議の後、全体で共有した。主な意見は次の通りだった。

- ・ワークシートの工夫が見られた。 ・段階に応じた学習の手立てが講じられている。
- ・身につけさせたい力、生徒の姿が明確だった。 ・クラスの雰囲気がとても良く、日頃の取り組みが表れている。
- ・グループの人数が適切だった。 ・掲示物が充実していた。 ・自分の発想力を生かせる学習活動だった。
- ・敬語を使っていた。 どう指導してきたのか。 →セールスマンになろうという目的意識を持たせた。
- ・学習が実生活に反映されるような場面があったか。 →入試の面接で相手を見て話せるようになった。
- ・指導事項が多岐にわたっている。 事項の絞り込みが必要。 ・聞く側の力を育成することも必要。

## 3 助言

- ・国語科における言語活動の充実とは、指導事項をふまえ、単元でつけたい力を身につけることである。学校として身につけさせたい力、国語科として身につけさせたい力、教師が身につけさせたい力は明確だった。それとともに指導事項を通して身につけさせたい力を明確にし、からめていく。
- ・単元を通して言語活動を設定する。主体的な意識をもたせる。課題解決に向けて、生徒が段階的に学習できる。これらの点が優れていた。
- ・年間指導計画等の見直しが必要。実践を通して計画的に行っていく。1学年ではなく3年間のスパンでの見直し。指導事項をふまえた年間指導計画の見直し。
- ・小中連携、小中一貫の視点ももって指導計画を立てる。義務教育9年間の系統を考える。
- ・実践の中での点と点をつないで、一つの線にしていくことが求められる。

提案2

提案者 三上 健二 (相模原地区)

<研究主題>

「読むこと」を通して自分の考えを持たせる授業の工夫  
—課題解決学習を取り入れた授業の実践—

## 1 提案内容

答えが一つしかない「課題」を教師が出題することで誰かが答えを言うことや教師の板書を待つ姿勢が身につけてしまい、大げさに言えば、考えることを放棄してしまう生徒が増えている。そこで、どうすれば生徒一人ひとりが教材と向き合い、よく読み、自分の考えをきちんと持つことができるようになるのかを考え、本テーマを設定した。

### (1) 「読むこと」を通して自分の考えを作り上げる手立て

#### ① 魅力ある課題作り

生徒の知的好奇心をくすぐり、それでいてすぐには答えられないような課題、時には自分以外の誰かと協力し合うことが求められる課題を通すことで、『伝え合う力』の育成や確かな「思考力」を育つことに繋がる。答えが一つではない課題や、教員が魅力あると思う課題、生徒と一緒に考える課題を作成していく必要がある。

## ② 小グループ活動の活用

個人学びだけではなく、他の人との交流を必要とする課題（ジャンプ課題）を設定することで、「課題」が生徒一人ひとりのものとなり、生徒が教材をよく読むようになる。自分の考えだけではなく、交流することで他者の意見や感想、気づきや考えを参考にし、自分の考えを深めることができる。

## ③ 根拠をあげて考えを記述させる

教科書からの根拠をあげて考えさせることで、不明確な部分を明確化することができる。また、グループ活動中に予想しない発言をした生徒に対して根拠は正しいのかどうかをもう一度確認させ、より考えを深めさせることができる。

以上の3点に重点を置き、授業を計画することで、生徒一人ひとりに確かな自分の考えを持たせることができる考えた。

## (2) 自分の考えを作り上げるための学びのステップ

前述の(1)の3つの手立てだけではなく、学びのステップを取り入れることで、考えることに慣れ、自分の考えを持つ習慣が身に付くと考えた。

課題の提案→個人読み→グループ交流①→全体交流→グループ交流→個人読み・記述

## (3) 授業実践 『走れメロス』

9つの課題を用意し、生徒に取り組ませた。また、課題は授業の最初に提示し、学びのステップを取り入れた。

## (4) 成果と課題

成果としては、以下の8つである。

- ① 教材をよく読むようになった。
- ② 自分の考えを口にする生徒が増えた。
- ③ 他の人の考えに耳を傾けようとする生徒が増えた。
- ④ 記述を嫌がらなくなった。
- ⑤ 自信を持ち、授業へ意欲的に参加しようとする姿勢が全体的に見られた。
- ⑥ 考える授業をして欲しいという要望が多くの生徒から出るようになった。
- ⑦ すぐグループになり、自然と交流できるようになった。
- ⑧ 正解を求めるのではなく、進んで考えることをするようになった。

課題としては、以下の3つである。

- ① 「課題」が生徒にとって本当に魅力あるものか。
- ② 時間の確保が難しい。
- ③ 他の方法の模索も考えたい。

## 2 協議内容

### (1) 魅力ある課題作りについて

- ・魅力ある課題作りの方法が大切であり、生徒が課題を見つけるものを授業者が仕組むことが大切である。

